

等の死體は又水の中へ入つて他の死體の上に重なるのであつた。そして下界のかういふ慘狀の上に天は暗い雲で蔽はれ、その雲は眞暗の中を、彼方此方へ光を投げる——怒れる雷電のぎくざぐした道程の爲めに引き裂かれた。

空氣の速力は、馬の疾走の爲めに立つ塵の運動で分る。そしてそれは馬を取圍んでゐた空氣中の「穴」を——その空中の穴の場所から馬が出ると、同じ速さで塞いで了ふ。

だが、諸君は、私が、風が空中で撰ぶ雑多の道を示したはい、が、風そのものが空中に見えないといつて私を譴責することが出来るやうに考へてゐるだらう。それに對して私は答へるが、空中に見えるものは、風の運動ではなくて、風が持運ぶ「物」の運動だ。

## 分類

暗黒、風、海上の嵐、洪水、燃えてゐる木、雨、空から來る雷電、地震、山の破裂、都市の破壊。

空中を——水や、木の枝や、人間を持運ぶ旋風。

人間が頂きにのつかつてゐて——風と風が打つかつて、すさまじい音を立て、風の爲めに引きちぎられる枝。

人間をのつけて折れる木。

岩に打つかつて粉々にこわれる船。

霞、雷電、旋風。

家畜の群。

人間を支へるこゝが出来ない木の上のつかつてゐる人間。人が一杯ゐる木や岩や、塔や、小山、それから小舟やテーブルや水槽や、その他浮く爲めの趣向、全場面を照す、雲から出る稻妻の添つた、男や女や動物で一杯の小山。



## 洪水の描寫

先づ等一に、凹凸のある山の頂きを畫いて、その山の麓には、その麓を取巻いてゐる谷を添へ、山腹の土の表面は小さな木のちつほけな根と一緒に迂り落ちて、あたりの大部分の岩を露はにすること。(水は)さういふ岸からあたりを荒し廻つて驅り下り、大きな木のねぢれた、節のある根に打つかり、それを露はにし、くつがへして目茶々々にする。裸に成つた山々は昔の地震の爲めに出来た深い割目、現はし、山の麓は大きな部分が今いつた山の高い峰の山腹から眞つ逆様に落ちた灌木のこわれで埋まり、泥や、木の根や枝や、泥や土や石の間にはさまつてゐる葉がそれにまじつてゐる。そして山のこわれが谷の底に落ちてその河の増大した水の障碍物に成るが、水はその障碍を押し遣つて恐しい波を立て、突進し、最大の波は都市の城壁や谷の田畑に打つかつて、それを目茶目茶にする。そしてその都市の高い建物のこわれから澤山の埃が空中に、雨に戦ふ烟や巻き上る雲のやうに成つて立ち登る。

然し増大した水はその水を閉込める池の周圍を走り、くるくゝ廻る渦卷を作していろいろな障碍物に打つかり、濁つた泡と成つて空中に飛び上り、それから又落つこつて自分が打つかる水を空中に跳び上らせる。打つかつたところから退ぞく、ぐるく廻る波は、その「勢」で、自分と反對の方向に動いてゐる他のぐるく廻る波の進路を突つ切つて動き、それに打つかつてから自分の土臺の水から千切れずに空中に跳び上る。そして水がその池から出るころには、へとくゝに成つた波が出口の方へ擴がるのが見える。それから——空中を落下して、この水は重みと勢ひとが出来るが、それから打つかつた處の水を貫ぬいて、それを引き裂き、猛烈な勢ひでもぐり込んで、深いところには到達し、それから又跳ね返つて、それと一緒に水中に沈んだ空氣と諸共に湖の表面に歸つて来る。その空氣は流れ木や、その他水よりも軽い物と一緒にぬらくした泡の中に止まる。そして又、それ等のもの、周圍に波の子供が生れるが、それは大きい運動を獲得すればする程、大きさも殖える。そして、その運動は波の土臺が廣く成るにつれて波を低くし、その波は凡んぎ眼に見えない程に成つて消失する。だが波がいろんな障碍に打つかるとしざつて、他の波が近づいて来るのに敵對し、既にその普通運動で示したやうにカーブが大きく成る。雨は雲から下りる時、その雲と同じ色だ。さいふのは雨の蔭に成つてゐる方だ。然し若しそこを太陽が貫通するに、雨は雲のやうに暗くなく成る。そして大きな山乃至大きな建物の崩壊物の大きな塊が落ちる時に大きな湖に打つかると澤山の水が空中に跳ね上り、その行程は水に打つかつたものの反對の方角だ。さいふのは反射角は投射



角に等しいからだ。

水に運れるもの、うち、重かつたり大きかつたりするものは二つの相反した土手から遠いところにある。水の渦巻はその中心に一番近いところが、一番速く廻轉する。海の波頭は波の顔を拵へてゐる滑かな分子に打つかり、摩擦して前へつんのめつて落ちる。そしてかういふ風に打つかつて——水は落ちる時に挽かれて小さな分子に成り、濃霧に變り、巻き上る烟や雲のやうに成つて風の流に交り、終には空中に立ち登つて、雲に變じる。だが空中を下る雨は風の流に打たれ、追はれてその風の稀薄さや濃厚さに従つて稀薄にも成り、濃厚にも成るが、そしてかういふ風にして空中に透明な雲が數限りなく生れるが、その雲は今いつた雨が拵たもので、見る者の眼に近い雨の線と成つて姿を現す。海の近くの山のだら／＼坂に打つかる波は泡立つてその小山の脊に迄も突進し、歸りしなに、續いて來る波の攻撃に面接して、大聲を上げて吼えてから恐しい勢ひを作して元の海に歸る。澤山の住居——つまり人間やいろんな動物が洪水に追はれてその海の近くにある小山のてつべんに居るのが見える。

ピオンビノの海の波は皆な泡立つてゐる。

飛び上る水に就いて——大きな塊が落つこつて水に打つかるところに就いて——ピオンビノの風に就いて。

風や雨の渦 その中に、空氣に交つてゐる枝や木。

小舟から雨水を乾すことに就いて。

### 三 遠近法、並びに光と影

自然のいろんな作用の研究の中、光の研究は、それを考へる者に大きな愉快を與へる。そして數學の有名な特徴の一つは、その論證の確實さは、研究者の心を大いに高尚にするといふことだ。それ故遠近法は學者、教授の定式や學說よりも尊敬す可きもの。といふのはその領土に於て、複雑な光線が、その伸長の段階を示され、その國には數學許りでなく、自然科学の光輝があり、兩者の花で以て裝られてゐるから。そしてその命題は随分迂曲な遣り方で説明せられてゐるから、私は簡單



に摘要をして話すが、といつても、問題が問題だから、「自然」並びに數學の兩方から例を引き、ある時には原因から結果を、ある時には結果から原因を歸納する。猶又私の結論に、結論に含まれてゐないやうなことも論じるが、それは結論に含まれてゐないからさいつても、當然關説す可きことだから。光を説明し度い願ふ私に、「萬物の光」なる主が説き明し給ひし如く、私もこの仕事を三つに分けて論じる。

#### 遠近法序言——眼の作用に就いて

讀者よ！どうして昔の人に信頼が置けよう。彼等は證明することの出来ない靈や生命に定義を與へようと掛つて、何時も經驗ではつきり知れ、證明出来るものか、何世紀もく分らぬ儘に放つてあるか間違つた解釋が施してあるのだから。

あんなにはつきり作用の證據を與へてゐる眼が、今日迄、無數の著者に依つて或る一つの見方で解釋されてゐるが、私は經驗に依りて眼が他の作用を有することを見出した。

遠近法は繪畫の手綱であり、能た。

遠近法とは、萬物がその寫象を、角錐狀の線で眼に傳へることを經驗が確認する合理的の證明。角錐狀の線といふのは物體の表面のいろんな末端から出て、遠方から次第に集中して、或る一點に集る線のこゝ。その點といふのは、この場合は、萬物の普遍的の審判者なる眼の中にある。私は分つこゝの出来ないものを點といふが、この眼の中にある點は分つことが出来ないから、この點よりも大きくないものは見ることが出来ないし、さういふ譯だから物から點に迄及んでゐる線は角錐狀であるこゝが必要だ。

そして若し視力はこの點にあるといふよりも寧ろひとみの真中にある黒點にあるといふことを證明しやうと思ふ者があるならば、粟や稗、その他さういふやうに小さなものはごんなところにあつても小さく成らず、この點よりも大きい物はすつかりとは見えない筈だ。答へることが出来る。

大氣には放射的の直線で成り立つてゐる角錐形が無數にあるが、その直線は、影に成つてそこにある物體の表面の輪廓から出来てゐる。そしてそれを生じる物體が遠方になればある程、その諸直線は鋭角に成る。その線は通り路で交叉し合ふが、ごつちやに成らずに別々の道を取つて進み、周圍の空氣中に擴がつて散在する。そしてそれ等は力が同じで、全體も一つくと等しく、一つくと



が全體と等しい。そしてさういふ直線で事物の姿は眼に傳はるのだが、全體が何處如何なるところにもあり、又各部分にある。そして一つ／＼の角錐形はどんな小さな部分にも、その角錐形を生じたもの、全體の姿を有してゐる。

學問なしにする者の仕出來す誤に就いて

學問がなしに實行々々さういふ者は、舵も磁石も無い船に乗込み、方角がつかない水先案内のやうなもの。

實行は充分な學問上の知識に基礎を置かねばならぬが、遠近法はその學問の指導者で又入口。遠近法を知らずにはどんな繪も満足には畫けぬ。

### 遠近法

同じ大きさでも遠方のものは小さく見える。

線の遠近法に就いて

線の遠近法は尺度で、乙は甲よりぎの位小さく、丙は乙よりどれ程小さいか、それをはつきりして、さうして、眼に見える限りの物に迄及ぶ——視線の働きに關する遠近法である。私は經驗に依つて次のことを發見した。乙が甲から、甲が諸君の眼から離れてゐる丈け離れてゐるにすると、兩方とも同じ大きさでも、甲の半分の大きさに見える。丙が乙より大きさが同じで、乙が甲から離れてゐるのと同じ距離ならば、乙の半分の大きさに見える。かうして順々に、同じ距離宛違つて、乙が甲の半分に成り、即ち、物はいつでも半分の大きさに成つて行く。只然し、距離が二十ブラツチヨ以上に成つてはいけない。何故さういふに二十ブラツチヨに成るに諸君と同じやうな人物は五分の四の大きさがなくなり、四十ブラツチヨでは十分の九、六十ブラツチヨでは二十分の十九の大きさがなく成り——かういふ風に繪に畫く面が諸君の脊の二倍離れて居れば、段々減小を續ける。何故なら距離が諸君の脊と同じならば、最初のブラツチヨと第二のブラツチヨの間には大きな相違があるから。

空中の遠近法に就いて

もう一つ私が空中の遠近法についてゐるのがあるが、それは大氣の相違で——下の方が一本の線



の上に終つて居るやうに見えるといろんな建物の距離を區別するここが出来るから。そしてさういふ風に見えるのは壁の遠い面に一群の建物が現はす外観で、その建物は壁のつぺんを見れば同じ大きさに見える。そして繪に描いてある建物を他の建物よりも遠方にあるやうに見せ度いなら、大氣を幾分濃厚にしなければいけない。いふ迄もなく、濃厚さの變らぬ太氣の中にあつては、その中にある一番遠い物、例へば山のやうな物は諸君の眼とそれ等の物の間に澤山の太氣があるから青く、日が東にある時の太氣と凡そ同じ色に見える。それ故一番近くにある建物は、壁の上を自然の色に描き、もつこ遠い建物は少しほんやり、そして一層青く描かなければいけない。そしてその倍程遠方に見えるやうに描き度いと思ふ建物は、青色の濃厚さを倍にして描き、五層倍遠方に見えるやうに描き度いと思ふ建物は五倍青く描かなければいけない。そしてこの規則の結果として——與へられたる線の上に同じ大きさに見える建物がどれが他のものよりもへだ、つて居り、大きいか、はつきり見わけが附くやうに成る。

普通の遠近法に就いて

同じ濃さで同じ色のものもいろ／＼違つた色の背景の前に置いて見るに同じ濃さには見えない。

そして濃さが同じで、色のいろ／＼あるものを一つ色の背景の前に置く、濃さが違つて見える。そして背景或ひは背景の前に見えるもの、色に種類が多ければ多い程、その濃さが異なるやうに見える。その背景を前にした物は同じ濃さであつても。

明るい背景の前に置いた暗いものは實際よりも小さく見える。

明るい物は濃い色の背景の前に置くに大きく見える。

不透明な物體の輪廓の消失に關する遠近法に就いて

不透明な物體の本當の輪廓が少し離れると不明瞭に成るのなら、遠くへだ、れば一層見えなく成る。そして輪廓があるからこそ不透明な物體の本當の形が知れるのだから、距離の爲めに全體が見えなく成れば、その部分や輪廓は一層見えなく成る道理だ。

繪畫の要件に就いて



畫の第一の要件は畫くものが浮彫のやうに成つて見えること、並びにそれを取巻く場面が、距離に従つてそれ／＼——三つの遠近法、といふのは物體の形の明瞭さの減小大きさの減小、色の減小の法則に従つて、繪面に這入つて來なければならぬ。これ等三つの遠近法の中、第一のは眼に起原を有し、他の二つは眼、眼が見る物體の間にある大氣に由來してゐる。

畫の第二の要件は仕草を適切に畫いて、人物が皆な兄弟のやうに見えないやうに人物に變化を備へさせることだ。

#### 遠近法

空氣は——その中にある事物の無數の寫象に充ち、それ等の寫象はすべて全體の中に、全體が一つの中に、全體が各々の中に現れてゐる。従つてかういふことに成る。鏡を二つ向ひ合せて並べると、甲の鏡は乙の鏡に、乙は甲にうつる。で甲は乙にうつつて乙のところに自分の中に寫つてゐる寫象をすつかり自分の寫象と一緒に持つて行くが、その中には乙の鏡の寫象もある。かういふ風にしてそれ等は無限に寫象から寫象へと續き、一つ／＼の鏡がその中に無數の鏡を有し、各々が一つ前のよりも小さく、各々他の鏡の中に存在する。

それ故、この例で、かういふことがはつきり分る。各々の事物が自分の寫象をその事物を見るこゝが出来らるあらゆる場所に傳送し、その反對に又その事物は自分の中へ、自分の分の前に在る物の寫象をすつかり受取るこゝが出来る。

従つて眼は空氣を通して、自分の前にある物に自分の寫象を傳送し、又それ等を自分の中、こゝには自分の表面に受取る。それを知力が受取つて吟味し、快しと思ふものを記憶に留める。

だから私は眼に在る「眼に見えない」力は、事物の寫象が眼にしかする如く自分自身を事物の方へ差出すこゝが出来ると——さう考へてゐる。

萬物の寫象が空中に擴がる、そのことの例證は澤山の鏡を丸く置くこゝ分る。鏡は無限に互ひの姿をうつし合ふ。一つの鏡の姿が他の鏡に届き、それが又その源に飛び歸り、小さく成つてもう一度向ふへ飛んで行き、それから又歸つて來るこゝいつた鹽梅で、それを數限りなく繰返す。

夜、一尺五六寸離れた二つの平面の鏡の間に燈火を置くと、この二つの鏡の各々の中に無數の燈火が見え、それが順に小さく成つて行く。

夜、部屋の壁と壁の間に燈火を置くこゝ、壁中がその燈火の姿に染り、燈火に晒されてゐる部分は直接に燈火に照される。尤もそれは姿が傳はることを妨げるものが間がない時の話だ。



このことは光線の傳送でもつゝ明瞭に分る。光線はすべての事物、従つてあらゆる物のあらゆる微細な部分に迄入り、その光線の源〔即ち、太陽〕の姿を事物に傳へる。

各物體が自分の寫象で周圍の空氣全體を充すこと、並びにこの空氣が自分の中に——自分の中にあるその他の無數の物體の寫象を受取ることが出来ることはこれ等の例ではつきり分るが、各物體はその大氣の全體に、自分の全體の姿を寫し、猶又その各々の姿が大氣の極くちつほけな部分にもあり、全體の姿が——大氣の全體、並びに、どんな細かい部分にもある。即ち、各々が全體のうちであり、全體があらゆる部分にある。

#### 繪畫並びに遠近法に就いて

繪畫に用ゐる遠近法には三つの種類がある。そのうち、第一のは不透明な物體の大きさの減小に關係し、第二のはその不透明な物體の輪廓の減小と消失を取扱ひ、第三はひゞく遠い所にある時その不透明な物體の色が薄く成り、なくなる——それを取扱つてゐる。

#### 不透明な物體の減小に関する遠近法に就いて

同じ大きさの不透明な物體の中、大きさの減小は、それを見る眼から隔つてゐる距離に従つて變化する。だがそれは逆比例に行く。といふのは距離が「大きく」成れば成る程不透明な物體は「小さく」見え、距離が「小ければ」小さい程、大きく見えるから。そしてこれは線の遠近法に基いてゐる。そして第二にあらゆる物體は遠い距離にある先づ第一に一番細い部分がなく成る。だから馬でいふと、脚がなく成つてから頭がなく成る。脚の方が細いから。同じ理窟で首がなくなつてから胴體がなく成る。だからかういふことに成る。馬の一番後迄残る部分は胴體で、卵形を失はないが、卵形といふよりも同筒形に近づいてゐる。そして前にいつた第二の結論から、厚さがなくなつてから長さがなく成る。眼が動かないと、遠近が點で終るが、眼が一直線を作して動く遠近が線で終る。といふのは線は點の運動で出来るものだが、私達の眼は點に集中する。従つてかういふことに成る。眼が動く點が動き、點が動く線が出来る。

遠方にある姿を見てゐるに最初に一番細かい部分の「知識」がなく成り、大きい部分の「知識」が最後迄保存されるが、末端の部分の認識はなく成り、卵形、乃至は丸く成つて、境界が不分明に成る。



本元の影、派生的の影の性質並びにいろいろな特徴、投射の工合を充分に論じたと思ふから、影が觸るいろいろな表面の種々の結果を、もうそろそろ説明してもいいやうな氣がする。

影は光を喰止めるもの

私はかう思ふのだが、影は遠近法には實に重大のもの。影が無ければ、不透明な、固い物體は、その輪廓の中にあるものも、第一その輪廓そのものも分らないのだから。尤ともその物體と色の違つた春景があれば格別だが。で、第一の論題で私は影のことを論じ、不透明なものはすべて影で光で包まれ、表面に影と光の着物を着てゐると——さういふここがいひ度いが、第一書はそのことに捧げる。猶又その影は——光線がなくなつて出来るが、光線がない分量がいろ／＼遠ふから暗さがいろ／＼のものがある。そしてさういふ影を私は本元の影といふが、それは第一の影で、附着する物體に蔽ひを拵へるからのこと。そしてその影に第二書を捧げる。かういふ本元の影から暗い光が出るが、それは空中に散つてゐるが、それが出る本元の影の異なるにつれて強さも違ふ。さういふ影を派生的の影と私はいふが、それは他の影から生れるものだからのこと。そしてさういふ影のことで第三書を拵へる。それからかういふ派生的の影が何かに打つかるこ、打つかつた數丈けの違

つた「結果」が生れる。そしてその影のことで第四書を拵へる。そして派生的の影が打つかるころはいつも光線で圍まれてゐるから、その影は光線と一緒に反動的の流を作してその源へ跳ね返り、即ちその本元の影に打つかり、それに交つて、それに變つて仕變ふ。その爲めに幾分本元の影の性質を變へるが。そしてそれに第五書を捧げる。そして第六書には反射した光のパフンドのいろいろな種類の研究を入れるが、それはさういふ明るい反射の光が出て来るいろいろな點の數丈けの色で本元の影を變へる。猶又第七部では反射の光の打つかる點とそれが出て来る點の間にある種々の距離、それからそれが不透明な物體に打つかつて出来るいろいろな色の影のこゝを論じる。

繪畫に就いて

影と光を見るのに三つの見方がある。一つは眼と光が同じ側にある時。第二は眼が物の前、光が物の後にある場合。そして第三は眼が物の前、光が横にあつて、物と眼と間の線と、物と光の間の線が打つかると直角に成るやうな鹽梅に成つてゐる場合。

影に就いて



影が光に圍まれてゐるところは、何處が明るくつて何處が暗いか、何處が光と對照して餘計ほんやりしてゐるか——それをよく注意するといふ。就中私は若い者の姿を畫く時には影を石の影のやうに終らせてはいけないといふことが注意したい。何故なら肉さいふものは、手を眼と光の間へ入れると赤く輝やき、明るく透明に見える——あれで分るやうに少しく透明さを持つてゐるものだから。そして色の鮮かな部分は光や影の間に置け。そして肉にはどの位濃い影が要るか、それが知り度かつたら、指で影を拵へよ。そしてそれを明くし度いさか濃くし度いさか思つたら、指を繪に近づけたり、遠ざけたりして、さういふ風にしてその影を寫すといふ。

従つて小さい姿はさつと畫くにさどめなければならぬ。

私はいふが、物が極く小さく見えたら、それは眼から遠いところにあるからのことだ。そしてさういふ場合には眼とその物體との間には可成り澤山の大氣がある筈だが、その大氣は物の形の明瞭さと抵觸するから、その物體の細かいところは見別けがつかなく成り認めることが出来なく成る。それ故、畫家よ、小さい人物は一寸大體を畫く丈で、あまり精しく畫いてはならぬ。でないといふ諸君の主人「自然」の製作に反對のものを拵へることに成るから。

物が小さいのは眼とその物體の間にある大きな空間の所爲だ。この大きな空間には澤山の太氣があるが、その太氣は自然に目の詰んだ物體を拵へ、それが間に入つて、眼から、對象の細かいところを隠して了ふ。

繪畫に就いて

同じ程度に濃い影の中では、眼に一番近い影が一番稀薄に見える。

派生的の影は源に近ければ近い程濃い。

本元的の影も派生的の影も蠟燭の光で出來たもの、方が太氣の光で出來るのよりも濃い。

繪畫に就いて

やつとわけがついて、その輪廓が分らない影——然しやつと分つて、恐るく、製作の中に入れてる影——さういふ影はちやんと——はつきり區切りをつけて畫いてはいけない。さうしないと、諸



君の製作は死んだものに成るから。

二〇八

顔が遠方では暗く見える理由

私達がよく知つてゐるやうに、大小は問はず、私達の対象に成る眼に見えるもの、姿はすべて、小さなひとみから感覺へ入つて来る。そんなに小さな入口から、廣大な空や大地の姿が這入るのだから、さういふ廣大なもの、中にあつては無にも等しい人間の顔は、それを減小する距離の爲めにひとみの極く小さな部分しか占有しないので、見別けることが出来ない道理だ。そして、外の表面がら、暗い中間物、といふのは暗くうつろで、小さな部屋を通つて、感官の席へ行かなければならないのだから、この「顔の」の寫象の色が強くなかつた日には、その寫象が通る暗黒の色に染つて、感官の席に着く時には、暗く見える。ひとみの中の點が黒い譯を説明する理由はこの外にはない。そしてそれは空氣のやうに透明な水分で充されてゐるから、板にあけた穴のやうな作用をする。中を覗くと黒く見えるが——明るくとも、暗くとも、空中の事物は、その暗さの中では不分明に成る。

遠方の影に就いて

影が遠方では消失するのは明るい大氣が眼と対象の間に廣く擴つてゐて、対象を自分の色で染めるからのことだ。

人間が或るところ迄離れると見別がつかなく成る譯

減小の遠近法が私達に教へる如く、対象は遠のくにつれて小さく成る。箭程ほゞ諸君から離れてゐる人間を見て、小さな針の目を諸君の眼にくつつけると、その針の目から——眼に送られる澤山の人間の姿が見えるが、それ等の姿はすべて同時にその針の目の中へ入つて来る。箭程の距離の人間の姿が、諸君の眼に送られて、針の目のほんの小さな場所を占めるならば、その小さな姿のうち、鼻や口や、その他細かいところをどうして見分けることが出来ようぞ。そしてさういふ細かいところを見なかつた日にはその人間が誰か分る由がない。人間の容貌が變る原因に成る顔形を見せないのだから。

繪畫に就いて

二〇九



對象の形の點の知識は距離が對象の大きさを減するにつれて段々なく成る。

二一〇

同じ大きさのものでも、畫いたもの、方が彫つたものよりも大きく見える譯

この命題は他の多くの命題のやうに容易に解明することは出来ぬが、まあやつて見ることにする。全體が出来なければ一部分。減小の遠近は理詰め、對象は眼から離れ、ば離れる程小さく成るといふことを論證するが、この説は全く經驗で確めることが出来る。扱て物と眼の間にある視線は繪の表面に達すると同一の境界〔即ち表面〕で中斷されるが、眼から彫刻に至る線には種々の境界があり、「視線」の長さもいろ／＼に成る。一番長い視線は他のものよりも遠い手足に迄伸びて居り、従つてその手足は小さく見える。他の部分よりも遠い、多くの小さな部分があるのだから、従つて他の線よりも長い線が澤山あるが、遠い部分<sup>とこ</sup>は必然的に小さく見え、小さく見えるから全物體にそれに應じた減小を與へる。繪にはさういふことはない。といふのは、視線がすべて同じ距離で終つてゐるから、減小を受けず、部分々々が減小しないから對象全體が減せず、従つて、彫刻に於けるやうに繪には減小が認められない。

反射に就いて

反射といふものは明るくつて、表面が滑かで、半ば不透明の物體から起るものでそれは光を受けるとき、球が飛び返つて來るやうに、その光を元の方へ逐ひ歸へす。

明るい反射が決してないところに就いて

すべて固體の表面はいろいろな光や影で蔽はれてゐる。光に二つの種類があつて、一つを本元的といひ、他を派生的といふ。本元的といふのは焰、太陽並びに大氣の光から出づるもの、こと。派生的の光は反射の光のこと。だが約束した定義に戻つていふと、影に成つてゐる景色、高い草や低い草が生えてゐる草地、緑の森、葉のない森のやうに影に成つてゐる物の方を向いてゐる物の、その側には明るい反射がない。といふのは本元の光の方に向いてゐる枝の、その部分は、その光の屬性に染つてゐるが、各々の枝が投げる影、外の枝の上にある枝が投げる影、それが非常に多いので、全體に深い影が添ひ、光はあるも無きが如くに成つて了ふ。だから、さういふやうな物は自分と向き合つてゐるものに反射の光をを投げる事が出来ない。

二一一



山から一番遠いところが最も明るい。

二二二

#### 遠近法

動いてゐる水、といふのはさゞなみの立つてゐる水に寫るもの、影や反射は、水の外にあつて、それ等の原因に成るものよりも必ず大きい。

○大氣が青いのは大氣の上の暗黒の所爲。何故といふに黒と白とは青に成るから。

雲の、眼に一番近い部分は高いところよりも迅速に見える。その爲めに、雲の或る部分と他の部分とが反對の方角に動いてゐるやうに見えることがよくある。

#### 繪畫に就いて

高い光、乃至或る特別なもの、光澤は光る部分の眞中にはなくて、それを見る眼につれていろ／＼に位置を變へる。

#### 白い物の畫き方

廣いところにある白い物體を畫くには——白そのものは無色だから、その上に置いたもの、色に染り、幾分その色に變る。日に照された風景がわきにあつて、その眞中にある、白い着物を着てる女を見るに、まばゆくつて、その諸部分は、太陽と同じく眼が痛く成る。そして——光線がまじり、貫通してゐるので明るい——大氣に晒されてゐるところは、その大氣が青いものだから、女の、大氣に晒されてゐるところは青色に濡れて見える。女の近くの地面が草地で、女が日に照されてゐる草地と太陽の間にあるならば、草地の方に向つてゐる女の着物の袂のあらゆる部分は反射の光の爲めに草地の色に染つてゐるのを發見する。かくして女は近くの、明るいもの、明るくないもの、兩方の色に變る。

#### 色に就いて

同じやうに白い色は最も暗い背景の上にあるものが最も眩しく見え、黒色は背景が白ければ白い程、色が強く見える。

二二三



赤も黄色の背景に對比するに最もはつきりして見え、一番鋭い對照を爲す色に對比すると、どの色でもさういふ風に成る。

## 繪 畫

白は色ではなくて、あらゆる色を受入れるものに成るこゝが出来る——さういふものだから白いものを大氣の中で見るにその影はすべて青い。この事は、「すべて不透明な物體の表面は周圍の物の色を幾分帯びる。」といふ第四の論題に適合して生じること。だからこの白い物は太陽こそその白い物の間に來る物の挿入の爲めに日光を奪はれるから、太陽こそ大氣に照されてゐる部分は太陽こそ大氣の色を帯び、日に照されてゐない部分は影に成つて大氣の色丈け帯びる。そして若しこの白い物が地平線迄擴つてゐる野原の緑を寫してゐる譯でもなく、地平線の輝きに面してゐる譯でもなかつたら、その白い物は疑ひもなく、大氣と同じ單純な色に見える。

## 繪畫に就いて

輝いてゐるもの、色はそれを輝かすもの、色を帯びる。

虹の眞中の色は御互ひにまじり合つてゐる。

虹さういふものは雨の中にも、それを見る眼の中にもある譯ではない。尤ともそれは雨や日や眼で來出来るものではあるが。

虹は常に雨と太陽の間にある眼が見るもの。従つて太陽が東にあり、雨が西の方に降つてゐると、虹はその西方の雨に生じる。

## 畫家は色の遠近法を覺えなければならぬこと

この、色の本來の要素の變化並びに消失、乃至は減小の遠近法を覺える手段として、木とか家とか人間とか場所とかいふやうなもので、風景の中に立つてゐる、百ブラッチョ宛離れてゐるものを選んで、第一の木の前にガラスを少しも動かないやうに据え、ガラスに寫つてゐる木の輪廓を寫す。それから、本當の木が、諸君が畫いた木と凡んど同じに見える程迄、そのガラスをわきにさける。それから諸君の畫を、兩方の色や形が似てゐるので、片々の眼を閉ると兩方ともガラスに畫いたも



ので同じ距離にあるやうに思はれるやうな工合に彩色せよ。それから、百ブラッチョ宛離れたところにある第二、第三の木を同じやうにして畫け。それ等は繪の仕事をする時應用することが出来て、常に諸君の手本とも成り、教師とも成るだらう。そしてそれは繪の仕事が距離がいふ點で成功する原因に成る。だが、乙は甲から二十ブラッチョ離れると甲の五分の四の大きさに減小することを私は發見した。

## 繪畫に就いて

影に成つてゐる物の各部分の輪廓と形は影や光がよく分らないが、光と影の間にある部分が一番はつきりしてゐる。

## 物體の境界は世にも小さきもの

この命題の眞實なることは、物の境界は一つの表面で、その表面といふものはその表面が取圍んでゐる物の一部分でもなければ、それを取巻いてゐる大氣の一部分でもなく、その場所が證明するやうに、大氣と物の間にはさまつてゐる中間物だといふ事實で證明することが出来る。だがこれ等ら。

## 光に就いて

不透明な物を照す光に四つ種類がある。即ち、私達の地平線の中にある大氣の光のやうに遍在的のものと、太陽や窓や戸や、その他のところにある光のやうに特殊のもの。それから第三は反射光。もう一つ光があるが、それはリンネルや純位の透明さの物を通すが、ガラス。水晶、その他の光り輝くもの、やうに透明なものは貫通しない。ガラスや水晶は、影に成るものこそそれを照す光の間に於いても何にも置いて無いのと同じ結果を生じる。そして私達の談論ではこれ等を別々に論じる。

## 眼で見えるもの、間にある大氣に就いて

同じ距離にある物でも、眼とその物體の間にある大氣の明るさに比例してはつきりしてゐるものも



あれば、そんなにはつきりしないのもある。だから、いふ迄もないことだが、眼と物の間にある大気の量が、それ等の物の輪廓の明瞭さを左右するものだから、物と、それを見る者の眼の距離に正比例して、それ等の物の明瞭さの消失の度合を明かにしなければいけない。

大氣の状態が光や影に影響を與へること

光線、乃至夜の火の光のやうに最も強い光に照される物は光と影が最も強い對照を示す。だがこれは繪にはあまり使つてはいけない。何故なら製作が堅く成り、美がなくなることから。

普通の光の中にある物は光と影があまり違はない。これは夕ぐれ時や雲のある時に見ること。さういふ時に畫く繪は感じが柔かで、どんな顔にも魅力がある。かういふ譯で極端といふものは如何なる場合にも有害なもの。過度の光は、物が堅く見え、又あまり暗くては物が見えない。中位が一番いい。

小さな光に就いて

小さな窓が投げる光は、殊に光が照す部屋が大きいと、光と影の強い對比を現はす。これは繪に

使ふのは面白くない。

「自然」から畫く時には光はどの位の高さにあればいいのか

「自然」から畫く時には、光は、變らないやうに北から來る光でなければいけない。光が南から來る時には日が當つても一日中光が變化を受けないやうに窓をカーテンで蔽つて置くこと。光を高いところに置く時には、各物體が地面に、自分だけの違はない影を投げるやうな工合にすること。

何故美しい色は光の中にあるか

色といふものは光ではつきりするものだといふことは分るから、最も多くの光があるところには、それに照される色の本當の性質が一番よく分るし、最も多くの影があるところは色が影の色の音響を一番餘計受けるといふことを推論することが出来る。それ故、畫家よ！明るい部屋に色の本當の性質を現はすことを忘れてはいけない。

人物の上にはさういふやうに光を配つたらいいか



光といふものは、諸君が人物を畫く自然の條件にびつたりしてゐなければならぬ。即ち日に照されてゐる人物を畫くならば大きな光と暗い影を畫き、周囲の物體の影並びにその物體の地上に投げる影を記すこと。ほんやりした天氣の時に畫くなら、光と影をあまりはつきり違はないやうにして、人物の足下あしもとにその他の影を畫いてはいけない。家の中で畫く時には、光と影をひきく相違させ、床ゆかの影も畫くこと。

そしてカーテンが掛つてゐる窓や白い壁を畫くならば、光と影があまり違つてはいけない。それが火に照されてゐるならば光は赤く、力強く、影は暗くしなければいけない。そして影が打つかるところは壁や床ゆかは、影がはつきりしてゐて、影は物體から遠く離れ、ば離れる程、廣く、大きく成る。一部分光に照され、一部分大氣に照されてゐるならば、大氣に照されてゐる部分を明るくして、光に照されてゐるところは光のやうに凡んど眞赤にするこゝ。中にも諸君が畫く人物、即ち生ある者にはすべて上から來る光を充分に添へよ。何故なら町で見る間は皆な上から光を浴びてゐるから。そして諸君に知らせ度いことは——どんなに親しい人だつて、下からの光に照されてゐるならば、誰なのか、見わけをつけることが難しいといふことだ。

畫家の仕事に對して下す可き判斷に就いて

先づ第一に人物を注意して、その人物の位置に相應するやうに凹凸が出來てゐるか、人物を照す光の工合が、影が作品の眞中も端の方も同じやうなことに成つてゐる——そんなことがありはしないか、それをよく注意しなければいけない。何故なら人物が影に包まれてゐる場合、一方にだけ影がついてゐる場合とは別だから、作品の眞中にある人物は影に包まれてゐるが、それは彼等が光の間にある暗い人物で影を受けてゐるから。光と主要な群衆の間にある人物は一方だけ影に成つてゐるが、それは光に向つてゐない部分が群衆に面してゐるからで、その爲めにその群衆が投げた影を複製し、群衆に面してゐない部分は光輝に面して、その輝きを複製してゐる。

第二に、人物の配置が「所作」で現さうと思ふ條件をびつたりしてゐるか、それを考へなければいけない。

第三は、人物が、その目的とびつたりして、きびく使つてあるか否か。

戰場に於けるやうに立錐の餘地がなく詰つてゐる體の下の部分を照す光に就いて

戰場にある人間や馬は體の諸部分を、その體の支へに成つてゐる地面の近くにあればある程暗く



しなければならぬ。そしてこれは、中へ行く程暗く成る井戸を見れば分ること、それは井戸の中が一番下のところは、他のところよりも明るい大気が少ないからのこと。そして舗石道は人間や馬の脚と同じ色でも、同じ角度の内に、それ等の脚よりも必ず明るく見える。

二二二

#### 位置に就いて

人物の位置によく注意せよ。何故かいふに「燈し火の如く」特殊の光のある暗い場所にあるの、太陽の光線がぢかに受けた明るい場所にあるのとは光や陰が違ふし、夕景や曇つた空の散光の中にある暗いところを日に照されてゐる大気の散光の中にあるのとは違ふから。

#### 影と光に就いて

自然の製作を複製する諸君、筋肉の光と影の大きさ、濃さ、形を見、光や影の形の長さや注意せよ。それ等はその真中の線の軸で、その筋肉の方へ向けられてゐる。

### 四 風景

#### 夕方或ひは朝のうちに見る都市乃至他の建物に就いて

霧若くは陰気な大気の中で、夕方、乃至は朝、遠方から見ると建物は、その時地平線の近くにある太陽に照される部分だけが明るくつて、それ等の建物の、日に當らない部分は霧と凡んど同じほんやりした色を帯びてゐる。

#### 南方の樹木に就いて

太陽が東にある時、南方及び北方の木は日に當る部分と陰に成る部分が凡んど同じ位だが、光の総量は木が西の方であればある程多く、陰の総量は木が東方であればある程多い。

#### 草地に就いて

太陽が東にあると、草地の草や他の小さな植物は、太陽の光を通すから緑色が餘計はつきりする。西方の草地にはかういふことはない。そして南方北方の草地の草は、緑色の鮮明さが普通である。

#### 風景の外観に就いて

二二三



太陽が東にあると、それに照される木は木全體が、最も明るい綠色を帯びる。そしてこれは私達の半球の半分、さいふのは東半分ひがしの太陽に照される葉が透明だからのこと。然るに西の半圓に於いては、草木が暗い色を帯び、空氣がしめり、陰氣で、鼠色を帯びてゐるので、明るい東方の草木のやうに透明でなく、そして濕氣を餘計含めば含む程餘計さうである。

東方の木の蔭は木の大きな部分を蔽ふ。そして、その木の蔭は葉が繁つて居れば居る程濃い。

#### 東方の木に就いて

太陽が東にある時、東方に見える木は、地面の方を除き、光が、その木の周圍をぐるつゝ取巻いてゐる。木が前季に刈込んでない限りは、そして南方並びに北方の木は、蔭と光とが半々だが、その木が東方乃至西方に倚つてゐるに従つて影が多くもあれば、光が多くもある。

見る眼が高いか、低いかの爲めに木の影と光とが違ふ。さいふのは、眼が木の上にあれば、木は極少し、か影がないし、下から見ると、澤山影がある。

草木の緑の種々雑多の影は木の種類に従つて異なる。

#### 木の影に就いて

太陽が東にある時、西方の木は餘りはつきりした輪廓も見えず、濃淡も殆んど分らないが、それはこの論文の第七部に論じたやうに眼と木の間にある曇つた大氣の所爲である。そしてそれ等の木には影がない。といふのは枝の各部分に影があつても、眼に映る影と光の姿がごつちやに成り、まじり合つて、その形が小さい爲めに見別がつかぬ。そして一番高い光は木の真中のところであり、影は木の末端の方にあるが、木と木の別べつは、森に木が生ひ茂つてゐる場合には、木と木の間にあつて影で分る。散々ばらばらちぢぢに成つてゐる木は、輪廓が凡んど分らない。

#### 東方の木に就いて

太陽が東方にある時には、東方の木は真中が暗く、端はしは明るい。

#### 都市の烟に就いて

太陽が東にある時には、烟は西方よりも東がはつきり見える。これには二つ原因がある。第一の原因は太陽が、その光線で、この烟の細かい分子を貫通して輝やき、それを照して、眼に見えるや



うにするからで、第二の原因は、この時刻に東方に見える家の屋根が影に成つてゐるからのことだ。さういふのはその傾斜の爲めに、屋根が日を受けないから。塵にもかういふところがあるので、兩者共濃密なれば濃密なる程、光を餘計背負ひ込む。そして兩方共真中が一番濃密だ。

#### 煙と塵に就いて

太陽が東にある時、都市の煙は西の方は見えぬ。さういふのは、太陽の光線が貫通するのでもなければ、暗い背景を後ろに控えてゐるのでもないから。それといふのは家の屋根は太陽に見せると同じ側を眼にも見せるが、さういふ明るい背景を後ろにしては煙は殆んど眼に映らぬ。ところが塵はさういふ場合には煙よりも餘計暗く見える。といふのは塵といふものは水氣で出来てゐる煙よりも濃密のものだから。

#### 都市の影と光に就いて

太陽が東にある時、都市を上から見下すと、都市の南部は、その屋根が半分影に成つて居り、北部も亦さうである。然し東の方はすっかり影に成つてゐて、西の方はすっかり日に當つてゐる。

#### 繪畫に就いて

いろいろな色の中、遠方から見て一番青に近い色は、黒に最も緑の近い色だ。その反對に黒に似るところが最も少ない色は、遠方から見ても、その持前の色を一番保留してゐる。それ故景色の緑色は黄色は白よりも青に變り易く、その反對に黄色や白は緑色程の變化は受けない。赤は猶さうだ。

#### 風景に就いて

遠方の山の影の暗い色は、日に當つてゐる部分よりも美しい、澄んだ青色を帯びる。従つてかういふことに成る——山の岩が赤味を帯びてゐる時には、その岩の、日に當つてゐる部分は鹿の毛の色で、はつきり日に照されて居れば居る程、持前の色を保留する。

#### 繪畫

冬の繪に出て来る景色には夏に見るやうな青い山を畫いてはならぬ。このことはこの章の第四部で證明出来る。彼處に、遠方から見る山の中で、山そのものが暗い色を帯びて居れば居る山程、濃



い青色に見ゆるといふことが述べてある。——何故かといふに葉が無く成れば、木は灰色に見え、葉があれば緑だ。そして緑色が灰色よりも濃い——その度合に伴って、緑色が灰色よりも濃い青色に見える。そして（この章の第五部に依つて）葉のある木の影は葉のない木の影よりも——葉のある木が葉のない木よりも濃厚な丈け暗い。かくて私達はこの命題を樹立したのである。

大氣の青色の定義は景色が冬よりも夏に濃い青色の影を帯びる理由を供給する。

## 風の畫き方に就いて

風を畫くには、風が近づいて大きな枝が頭を振り、葉がひつくり返る有様に加へて、攪亂した空氣に交つてゐる細かな塵の雲を畫かなければいけない。

## 野山の景色の描き方に就いて

細い枝に分れて居れば居る程、木や灌木の影が疎い道理。大きい葉を持つて居れば居る程、木は大きな影を投げる。

## 木並びにその光に就いて

田舎の景色——或ひは木のある景色を畫く練習をする眞の方法は太陽が隠れて、野原が太陽の直接の光線ではなく散光を受けてゐる時の景を選ぶに限る。といふのはさういふ時には影がはつきり分つて、光こまるで違つたものに成るから。

## 木に就いて

遠方の木は背景に成る大氣に對してぎんな輪廓を示すだらうか。透明な大氣を背景にした木の輪廓は遠く成れば遠く成る程、形が圓に近づき、近づけば近づく程圓形を離れる。だから第一の木「甲」は眼に近いから枝ぶりの眞の姿を現してゐるが「乙」に成ると幾分それがはつきりしない。そして「丙」に成ると全然それが分らなく成つて、枝が一本も分らなく成つて木全體がやつと認められる丈けに成つてゐる。

ぎんな形のもので、影に成つてゐるものは遠方にあると丸く見える。といふのは、或るものが直角の長方形ならば、一寸離れば、角が見えなく成る。そしてもう少し離れると小さい方の片がなくなる。かくして全體を失ふ前に部分を失ふ。といふのは部分は全體よりも小さいからだから。



人間もさういふ風にして見ると胴が見えなく成る前に足や腕や頭が見えなく成り、次に横の末端が見えなく成る前に縦の末端がなくなつて成る。縦と横が同じに成ると、角が残つて居れば四角形に成るのだが、それが無いから丸く成る。

#### 景色の描き方

景色といふものは木が半分日に當り、半分影に成つてゐるやうに描かなければいけない。だが、景色は太陽が雲に蔽はれてゐる時に畫いた方がいゝ。何故かといふに、その時には木が空に遍在してゐる光と、地に遍在してゐる影に蔽はれてゐるから。そして木は木の真中のところ並びに地べたに近いところ程暗い。

#### 太陽若くは大氣に照されてゐる樹木に就いて

暗い色の葉のある、太陽並びに大氣に照されてゐる木は一方を大氣丈けに照され、さうして照される結果、大氣の青色を帯びる。そして他の側は太陽と大氣との両方に照されるが、太陽に照される部分はきらくしてゐる。

#### 緑の影に就いて

草木の影はいつも青色に近いが、他のもの、影も亦さうである。そして遠方であればある程その青色に近づき、近くにあるに伴れてさうでなく成る。

大氣の青色を反射する葉はいつもな、めに姿を現す。

#### 青緑並びに山の——照されてゐる部分に就いて

輝やく部分が、最も力強い光に照されるのだと遠方ではその持前の色を餘計現はす。

葉のある木の繪を描くに當つて、同じ色の木が背景にある木には同じ色を無闇に使つてはいけない。葉を明るくしたり、暗くしたり、或ひははつきりした緑色を使つたりして變へなければいけない。



木の枝の先は果物の重みで引き倒されない限り、出来る丈け空に向つて伸びやうとしてゐる。

木の葉の表は夜下る露から營養を受ける爲めに空の方を向いてゐる。

太陽は草木に靈命とを與へ、地は濕氣で彼等を養ふ。この事に就いては小さい根を一つ丈瓢箪に残して、水から養ひを受ける儘にしておく實驗をやつて見た。ところが瓢箪は生じることが出来る限りの果實——長い種類の六十程の瓢箪を成育させた。私は、熱心に瓢箪が命を保持してゐる原因の研究に取掛つたが、それは夜の露で、夜の靄が瓢箪の大きな葉の接ぎ目から瓢箪に多量の濕氣を供給し、かくして木と、木の子供、さいふよりも木の子供を生む種を養つてゐることが分つた。

一季中の最後の枝の上に生じる葉の規則はかうだ。二對の枝の上に葉は反對の方角に成長する。といふのは葉は成長の初めには枝の方へ振り返へるが、その向ひ方が、上の六番目の葉が下の六番目の葉の上に成るやうな工合である。そして葉の曲り方は一つが右の仲間の方へ向へば、他のが左の方へ向ふといつた鹽梅である。

葉は枝や翌季成長する果物を養ふ乳房に成る。

透明な葉の影は下から見ても葉の表の影と同じ。それは影は光に照されてゐる方と同じやうに、裏も影が透明に見えるから。だが光は透明には見えない。

#### 野邊の草木に就いて

草の中にある木の影に成つてゐる草の中、影の前にある草は、莖を暗い背景に對して照され、影に成つてゐる草は明るい背景、といふのは影の向ふにある背景に對比して莖が暗い。

#### 眼と光と間にある木に就いて

眼と光の間にある木は、前の方は明るい、その明るさは、(裏返しに成つてゐる)透明な葉や、表を見せて輝いてゐる葉の爲めに色々で、下や後ろの背景は、緑が暗い。何故といふにその木の前の部分の爲めに影に成るから。そしてかういふことは眼よりも高い木にあることだ。



## 透明な葉の前にある暗い葉に就いて

葉が光と眼の間にある時、眼に最も近い葉が一番暗く、一番向ふの葉が一番明るい。若し大氣を背景としないならば。そしてそれは、木の真中よりも向ふ、即ち光の方にある葉に見ることだ。

## 暗い葉を照す光に就いて

暗黒色の葉を照す光はその葉に映る大氣の色によく似てゐる。それは暗黒と交つて——照されてゐる部分の輝きが自然に青色を現じるからのことだ。そしてその輝やきはさういふ葉の滑かな表面に寫つてゐる大氣の青さから出じ、通常光が暗いものゝ上に落ちる時に生じる青色を増加する。

## 黄緑色の葉を照す光に就いて

然し黄緑色の葉は大氣を寫しても、青色に近い反射は拵へない。それは鏡に寫せば何でも幾分はその鏡の色を帯びるものだから。だから葉の黄色に映つた大氣の青は緑に見える。といふのは青と黄とがまじる最も明るい緑色に變るから。従つて黄色を帯びた明るい葉の色は黄緑色を現じる。

草の影は黒いことがない。それは大氣が行互つてゐるところには暗黒といふものはないのだから。

葉はいつも表を空に向けて、表面全體に——大氣の緩かな運動と共に落ち来る露を受取ることが出来るやうにしてある。そしてこれ等の葉は草木の上に、或る葉が成る丈け他の葉を蔽はないで、壁を蔽つてゐる蔦に見るやうに、一つ置きにある葉が他の葉の上に成るやうに並んでゐる。そしてそれは二つの目的に適つてゐる。即ち餘地を残して、空氣と太陽とがその中を貫通することが出来るやうにするのこゝ、もう今一つの目的は第一の葉から落ちる滴が第四の葉に落ち、「蔦」の他の木の場合には第六の葉に落ちるやうにする爲である。

表面が滑かな葉は大抵裏と表が同じ色だが、大氣に照されてゐる側は大氣の色を帯びる。そして眼がその近くにあつて、そしてそれが「小さく」見えるに比例して、一層大氣の色を帯びる。そして影はいつも、影に對比して現れる高い光の爲めに裏よりも表の方が濃い。

葉は裏と表が同じ色だけれど、裏の方が美しい。そしてその色は黄色に近い緑。そしてそれは



この葉が眼ミ——葉を表から照す光の間に来る時のことだ。その影も表の影と同じ位置にある。それ故に、畫家よ！近くの木を描く時には、諸君の眼が木よりも幾らか低い時にはある葉は表が、ある葉は裏が見ゆることを忘るゝ勿れ。そして表は小さく見えるに従つて濃い青色を呈するが、同じ葉もある時には裏と表と同方を示すから、二色で描かなければいけない。

緑の帯が他の緑の帯の後にある時には、葉の上の高い光、並びに葉の透明な光は大氣の明るさに對比してゐる光よりも強く現れる。

そして若し太陽が葉を照す時、葉が太陽と眼の間にあるのではなく、眼も太陽に向つてゐるのでなかつたなら、葉の高い光ミ透明な光が極めて力強い。

低い枝を畫くことは非常に有益だ。そしてそれ等は暗くなければならず、木から少し離れたところにある明るい緑の帯の背景にならなければいけない。

下から見た暗緑の中、眼に一番近い部分、即ち明るい大氣から一番離れたところが最も暗い。

日が當つてゐる葉は決して透明に描いてはいけない。いつもはつきりしてゐないのだから。そしてそれはその透明な葉の上に、その上にある葉の影が刻まれてゐるからのことだ。そしてその影にはちやんとした輪廓と暗さがある。そしてある時には葉の半分若くは三分の一が影に成つてゐるから、さういふ葉の體制は不明瞭で、その形を「はつきり」模寫することは避く可きである。

擴つてゐる大枝の上の小枝は下の小枝がするよりも、その親枝に接近しようとする。

鋭角を作して光を受ける葉は透明さが少ない。

遠方の物の描き方に就いて

平坦な地の一番近くにある大氣が他の大氣よりも濃厚で、高く上れば上る程、軽く、透明に成ることは明瞭だ。



諸君から少し離れたところにある大きい、高い事物は、その低い部分は餘りよく見えない。といふのはその部分の線は大氣の一番濃厚な部分を通つてゐるから。だがそれ等の高いもの、頂きは、(諸君の眼から出る時には濃厚な大氣の中で出来るけれども、對象の最高の頂きに行きつくから、下の大氣よりもずつと稀薄な大氣の中で進路を終る)線に依つて見える。従つてこの線が遠く伸びるにつれて、大氣は益々稀薄に來る。

それ故に畫家よ！山を描く時には、麓は常に頂きよりも青白いことを知れ。そして山が遠ければ遠い程、麓は青白く、山が高ければ高い程、その眞の姿の色とを現はす道理だ。

大氣は青白く描かなければならぬこと

大氣は地面に近いところは濃厚で高ければ高い程稀薄に成るものだから、太陽が東にあり、諸君が西に向つて、北や南も見てゐる時に、その濃厚な空氣は稀薄な空氣よりも日の光を餘計受取ることが分るが、それは光線が餘計大きい抵抗に打つかるからのことだ。そして地平線が低い野原で遮られてゐるさ、空のその一番遠いところは、その餘計に濃厚な白い大氣を通して見るのだから、その爲にさういふやうな中間物を通して、見る時のやうに本當の色が破壊される。そしてその空は頭

の上よりも白く見えるが、それは頭の上の空は視線が、濃い水分を背負つた大氣の空間を少し、か横斷しないからのことだ。だが東の方を見るさ大氣は低い程、暗く見えるが、それはその低い大氣の中では光線が自由に通る、その自由が少ないからのことだ。



第四書 幻想



不幸な柳が葡萄やその他近くにある樹の爲め始終片輪しよつちゆうにされ、枝を切られ、損害を與へられて、細い枝を自分の好きなだけ伸ばす事はおろか、空に向けて晴々せきせきとした氣持を味ふことも出来ないで、全能力を傾けて想像の「入口」を開け、始終考へ込んで、植物の世界の中で、自分(柳)の枝の助けを借りる必要のない者ゝ縁組をしやうと思つた。さうして暫らくの間想像を働かせてゐたが、突然飄筆ひょうふのことが思ひ當つたので、柳の枝はうれしくつてくゞぶるくゞつみ身震みふるひした。といふのは自分の希望に相應あはしい仲間がめつかつたやうに思へたから。何故かといふに本來飄筆は他人に抱かれるといふよりも、他人を抱く方が相應しく出来てゐるから。——さう結論がついたので、柳は枝を空に向けて、誰か仲の好い鳥が来て、自分の希望の仲人に成つて呉れるのを待設けてゐた。近くのいろんな鳥の中から鵲うさぎをめつけて「お、温和しい方！お前さんはこの間明方につくした、荒つほい、肉食の鷹がお前さんを食つちまはうとした時に私の枝の中に隠れ家をめつけなすつた。お前さんの翼が休息を求めた時、お前さんはよく私のところで休みなすつた。お前さんは可愛い、相手と私の枝の中で好きな事をして楽しみなすつた。——そのよしみで私御前さんに御頼みするの

だが、飄筆を探して種を貰つて来て呉れませんか。その種から生れるものは、自分の子供同前面倒を見るとか何とか、呉れる氣に成りさうな事を澤山並べてね。まあ然し辯舌の達者なお前さんに指圖さしずをするには當らないがね。さうして下さるなら、私喜んで私の枝を御前さんの家に御貸し、ますよ。家中の方を連れて來なさるがい、。店賃たなぢは一文も取らないから。」そこで鵲は柳にもつといろんな要求をして——その中で一番重大な要求は蛇やいたちを住ませちや困るこいふのだつたが——奴は尻尾しっぽをおつ立て、頭を下げ枝を離れて、空中に浮び出た。それから迅速の空氣の中を、羽根をばたつかせて、彼方を探ね、此方を探し尻尾をかぢかぢに使つて飛び廻つて飄筆のところへやつて來て、丁寧に挨拶をしたが二言三言で、例の種を貰つた。種を持つて歸つたので、嬉しげな顔付きで迎へられた。で、鵲は足でもつて柳のそばの土をけすつてくちばしで持つて、ぐるつと丸く種を植ゑた。その種は間も無く成長して、枝が殖え擴がつたので、柳の枝をすつかり蔽つて了つて、柳から、太陽や天空の美しさを隠すに至つた。ところが害惡はそれだけにとゞまらず、飄筆は細い枝のさきをぐつとつかんで地べたに引き倒し、ねぢつたり、ゆがめたりして變な格好にして了つた。で柳は體を震はたせり、のた打ち廻つたりして、飄筆に手を放させやうとし、毎日々々さういふつまらない希望を抱いてゐたが、それは無駄だつた。こいふのは飄筆はしつかり、堅く握つてゐたので、そ



んな希望は到底遂げられなかつたから。で柳は通りすがりの風を見ると早速それに身を任せた。ところが風がひきく吹いて古い、うつろの幹を眞つ二つに引つ裂いて了つた。で柳は二つに成つて打つ到れ乍ら、私は最期がよくなかつたに空しく嘆きを洩らした。

つぐみは人間が梟をつかまへ、丈夫な縄で足を結えて、自由を利かなくして了つたのを見て大喜びだつた。ところがその後「もち」が道具で、梟が——つぐみが自由は愚か、命迄も失ふ原因と成つて了つた。支配者が自由を失ふのを見て喜んだところが、その爲め後には救助の望みが絶え、敵の勢力の中に縛られて自由きころか時々命迄も失ふ國民も亦この類。

雪がすてきに高い山のでつべんに置いてある岩の頂きに嘯りついてゐる事に気が付いたが、考へ込んで、こんなこゝを心の中でいひ始めた。「ちつほけな雪のくせに、こんな高いところゝゐて高慢な奴と思はれはしないか知ら。私の周囲のあんなに澤山の雪が私よりも低いところに居るのを見てゐる乍ら。本當に私のやうなちつほけな雪がこんな高いところゝゐるちや濟まない。そして私が取るに足らぬ身の上だといふことを知る爲めについ昨日私の仲間に降りかゝつた運命を私は喜んで學ぶが、

奴等二三時間のうちに御天道様に打ちこわされて了つた。それといふのも要りもしない高みに身を置いたからのことだ。私は御天道様の怒りを遁れて身を落し、ちつほけな體に相應しいところをみつませう。」

それからわれと自分の體を落して、高い岩から他の雪のところへ轉り落ちた。低いところをくゞ求めてゐるうちに段々嵩が殖えて遂にある小山の上に足を止めたが、その小山位の大きさに成り、その夏目にとけた雪のうちの最後のものと成つた。

へり下つて而して尊ばれる者も亦此の如し。

くるみが鳥に運ばれて高い鐘樓の頂きを持つて行かれたが、そこで或る割れ目に落つこつた爲めに鳥の恐しくちばしを遁れ、壁に向つて頼むには——神様はあなたにめぐみや御典へに成つておなたを高く、偉大にし、又こんな美しい、音の佳い鐘を下さつて金持になすつたのだから、それを思召して、どうぞ私を御助け下さい。年取つた御父さんのみどりの枝の下に落ちて、御父さんの落した葉がかぶさつてゐる淡赤い土の上ゝゐる事が出来なかつたのですから、私を見捨てちや困ります。だつて恐しい鳥の残酷なくちばしに取つつかまつた時には、逃げられたらもう私は穴の中



一生を送らうと誓つたのですから。それを聞いて壁は可哀さうに成り、くるみが落ちたところに隠れ家を喜んで呉れてやつた。ところが一寸の間にくるみははせて、石の割れ目の間は根を張るやうに成り、又その根を彼方此方にぐんぐん擴け、穴の中から新芽を放り出したが、その新芽が間もなく建物の頂きよりも高く成つた。そして、ねぢれた根が太く成るにつれて壁が口を開け、古い石が元のところにもたれなくなつて來た。壁は下らない同情をして「しまつた—と思つたが後の祭り、間もなく幾つにも裂け、大きな部分が崩れて落ちた。

「たまつばき—は新しい果物をしよつてゐる柔かな枝を、うるさいつぐみがとんがつた爪やくちばしでちくちく刺すので私の甘い果物をつまむにしても、天道様のこがすやうな光から私を守つて呉れる葉を取つちや困る。痛い爪で柔かな皮をひつばいだり、めくつたりしちやあ困る—頼んで、あはれつほく小言を並べた。ところがつぐみは圖々しくも怒り付けた。「喧しい！無禮な奴め！御前が出来たのは、俺にこの果物を食べさせるためだといふ事を知らねえのか。お前が此世に生れたのはこの果物を俺に食べさせる爲めだ—いふ事が分らねえのか。蓮つ葉め、今度の冬には火の餌食に成るといふことを知らないのか。」木は溫和しくこれを聞いてはゐるが、涙が出ない譯には行かなかつた。

ところがそれから間もなく、そのつぐみが網にかゝつて捕へられたが、奴を押込める籠を拵へるのに幾本かの枝を拂つたが、その枝の中には、籠の棒を拵へる爲めに柔かなたまつばきから切つたのもあつた。でその枝がつぐみが自由が利かなく成るも、こに成つたことを喜んでこんなことをいつた。「つぐみさん。私達は此處にゐるよ。未だ御前さんのいつたやうに火に焼かれちやるないよ。私達が焼かれるよりも御前さんが牢へ打ち込まれる方が早いやうだね。」

焔がもう一月程ガラスの爐の中に住んでゐるが、或る時綺麗な、きら／＼する燭臺に乗つて蠟燭が焔の方へやつて來るのを見た。焔は蠟燭の方へ行き度くつて仕方がなかつた。そこで一つの焔が道を外して、自分達の燃料の未だ燃えてない木の中へ忍び込み、小さな穴から向ふの外へ——近くにゐる蠟燭のところにへ出ていきなり蠟燭に飛び掛り、がつ／＼食つて、大方食べ盡して了つた。だが、こゝで死んぢやあ溜らないと思つて、出て來た爐の中へ戻らうとしたが駄目だつた。そして蠟燭と一緒に衰へ、死んで了はなければならなく成つた。で遂に、自分の姉妹は皆な輝やき、命の美しさを保存してゐるのを見乍ら歎き後悔して汚ない烟に變つて了つた。



無花果の樹が楡の木のそばにゐるが、楡の木は果物が無いのに、無花果の未だ熟つてない子供から、圖々しくも光線を遮つてゐるので、戒めて云ふのは「楡さん、よくまあ恥しくもなく私の前に立つてゐられますね。まあ私の子供達が大きく成る迄待つてゐて下さい。御前さんどういふところになるかその時に成れば分るから。」ところが子供達が成熟した時に、一聯隊の兵士がそこへやつて来て、果物を取る爲めに、無花果の枝を引つちぎり、その無花果の樹をすつかり裸にして、へし折つて了つた。

で、無花果がかうして、手足を片輪にされて立つてゐると、楡がかういつて尋ねた。「無花果さん子供の爲めにそんな憂目を見るより、いつそ子供のない方がみんなによかつたでせう。」

昔、剃刀がさやに成つてゐる柄から出て日に當つたが、自分の顔に日がうつるのを見て大いに得意に成り、それをつらく考へて、一人でこんな事をいひ出した。「今出て来た店へ俺は歸らなくちやならないだらうか。そんな事はあるまい！こんなに眩しい程美しいものが身を屈してあんな下らない用に使はれるなんて——そんな事は神様達の思召しでない！俺に、シャボン玉のくつついてゐる、野暮な百姓の顎を剃らせるか何とか、そんな品の悪い仕事をやらせる者があるならそいつあ

狂人だ！この俺はそんな仕事をするために出来てゐるのか。そんな事があつて溜るか！俺は何處かひつそりしたところに隠れて、靜かに氣樂に一生を送る。」

で、幾月の間か隠れてゐるが、或る日明るいところへ歸つて来て、さやから出たが、見るに自分は錆びた鋸のやうになつてゐて、太陽がきら／＼する奴をもう反射する事が出来ない。取り返しのつかぬ怪我をしたのを嘆いて「めづらしくよく切れた私の刃を床屋さんに使つて貰つた方がどんなによかつたらう！きらきらしてゐる刃はどうなつたらう。汚ない、腹の悪い錆が消して了やあがつた！」といったが後の祭りだつた。

働かないでのらくらしてゐる連中にもかういふ事がある。といふのはさういふ連中は剃刀のやうによく切れる刃をなくして「無智」の錆が彼等の心の姿をこわして了ふから。

可成り大きな石がつい近頃水を離れて、美しい柴林のはづれ、石の多い道の上の或る場所に立つて、色様々、種々雑多の花で賑やかな植物に圍まれてゐて、石が澤山集つて居るのを見下したが、その石といふのは下の道路に重なり合つてゐるのだつた。で自分も下へおり度く成つて考へたのは「此處にゐて、こんな木をどうしやうといふのだ、私はあそこの姉妹と一緒に住んだ方がい。」



で、ごろ／＼と馳け下りて、好きな仲間の中へ入った。ミッころが少しゆるるうちに、荷車の輪、馬の鐵の蹄、通行人の足の爲めにのべつに苦勞しなければならぬことに氣が付いた。ある者は彼をひつくり返し、ある者は彼をふんづけた。で泥や動物の糞に埋まり乍ら體を持上げて、自分が捨て、来たミッころを、孤獨な、平和なミッころだつたのと思つたが、後の祭りだつた。

孤獨と默想の生活を捨て、町中、限りなき惡に充ち満てる人々の間に住む者にもかういふやうなことがある。

綺麗な蝶々が暗いところをのらくらほつつき廻り、飛び廻つてゐる。一つ光が見えて来たので、その光の方へ出掛け、いろんな圓を作つて光の周圍を飛び廻つて、その美しい物を驚嘆して見てゐるが、見てゐる丈では我慢が出来なく成つて、いゝにほひのする花に戯れる時のやうに戯れて——その光の方へ思ひ切つてづか／＼と進み寄つたが、その爲めに、羽根と足の先き、その他さういふやうな先のところを焼いて了つた。で下へ下りて、何だつてこんなことに成つたのだらうと驚いて考へ始めた。といふのは、こんな美しいもの、爲めに怪我なんかすることがあるとは彼には考へられなかつたから。それから失つた力を幾分回復して、もう一度飛んで、思ひ切つて燂の中へ入

つたが、燂の燃料の油の中へ——見る間に焼け落ちたが、何故こんな事に成つたかと考へて、「畜生私はお前さんの中に私の幸福をめつたと思つたのに！私の狂人染みた考へを今更歎いたつて後の祭だが、かういふ眼にあつて、お前さんが肉食の、亂暴な方といふことが分りました」を獨言する力しか残つてゐなかつた。

それに對して光が答へていふやう。「私の扱ひ方を知らない奴には、私はいつもさうしてやる。」眼の前に肉慾的世俗的の快樂を見ると、それがさういふ物か考へずに、蝶々のやうにそれに向つて急ぎ、長い間さういふ習慣を重ねて恥を掻き、損害を蒙つてから初めて眼が覺める連中も亦此の如し

火打石が鋼に打たれて大いに驚ろき、鋼に向つてつけ／＼いふのには「何だつて私をいぢめるんだね。ふざけちや困るよ。私なんぞを相手したのは御前さんの間違ひだよ。私は誰にだつて惡戯をしたことはないのだから。」鋼が答へていふのには、「まあ辛抱してゐなさい。さうすりやあ御前さんから大變なものが生れるから。」これを聞いて火打石は面を柔らげ、「殉教」をぢつと辛抱してゐたが、驚く可き火が自分から生れるのを見たが、その火はその力でいろんな物の原動力に成つた。

研究の初めにはうろ／＼したが、克己自制して絶えず研究に専心してゐた爲めに驚く可き物を生



む人々も亦此の如し。

水が高慢な海、つまり矢つ張り水の中にある事に氣が付いたが、空氣よりも高いところに登り度く成つて来た。で火に助けて貰ひ、薄い水氣になつて登つたが、空氣位薄く成つて了つた。それからうん、高いところに登つてから空氣が更に稀薄で、冷たいところにやつて来たが、そこで火に捨てられた。で、小さい分子が一緒に成つて重く成つて了つた。で、そこから落つこつて、その「誇り」は臺なしになつたが、空から落ちるに乾き切つて土に飲まれて、その土の中に長い間閉ぢ込められて、罪滅しをした。

百合がチ、ノー河の土手に根を張つたが、水が土手を流し、そしてその土手と一緒に百合も持つて了つた。

牡蠣が外の魚と一緒に、海に近い漁師の家から投げ出されて、海へ連れて行つて呉れと鼠に頼んだ。鼠は食つちまつてやらうと思つて、口を明けなさいといつたが、食べやうとすると、かきは鼠

の頭を閉めて了つた。ところへ猫が来て、鼠を殺した。

蜘蛛が鍵の穴の中で休まうと思つて、死んで了つた。

小刀、即ち人工の武器が、人間から、爪、即ち天然の武器を奪ふ。

鏡は女王を寫してゐるばつてゐるが、女王が行つて了つてからも不相變るばつてゐる。

紙はインキのくすんだ色で無闇に汚れたので、それを悲しんだら、インキは俺を使つていろんな事を書く——その爲めに御前は保存されるのだと説明した。

忠義。鶴は俺達の見張りが悪い爲めに 王様が殺つつけられるやうなことがあつてはならないと思つて、夜になると、足に石を持つて王様のまわりに立つてゐる。愛、恐怖、尊敬——これ等の文字を鶴の三つの石に書くといひ。



## 「い、事の報めに」

果物を實らせた時に打たれるくるみの樹は有名な仕事をした爲めに、いろんな方法で嫉妬の爲めに打たれる者の表象。

好い果實を接木する茨は本來道德といふ事に氣はないのだから、教師の助けで此上なく有要な徳を生むもの、表象。

或るものが他のものを押し倒す。この立方體（譯者註、骸ころのついた圖が書いてある由）に人類の生活状態が現れてゐる。

## 「諷諭の畫の爲めに」

幸福の表象のイル・モローは髪が延び、着物を着て、兩手を前へ置きメスセル・ガルチエリは彼に挨拶しやうと思つて、彼の前へ出乍ら、下から彼の着物を引つ張つてゐる。

猶又貧乏はどつとするやうな姿をして若者の後を追つ掛けてゐるが、イル・モローは若者を着物の裾で隠し、かの怪物を鍍金した笏でおごしてゐる。

## 「諷諭の畫の爲めに」

イル・モローは眼鏡を掛け、嫉妬はうそをいふ中傷と一緒に座し、正義はイル・モローを怒つてゐる。

勞苦は手に葡萄の樹を持つてゐる。

こんなに精しく寫のこを書くのも、私の運命らしい。何故かといふに、幼年時代の最初の記憶にあることだが、私が搖籃の中ゆりかごにゐると一羽の鳶がやつて来て、尻尾で私の口を開け、何度も唇を打つたことがあるやうな氣がするから。

## 親愛なるベネデット

この東方から、此處の報知を御送りするに當つて、是非とも御話し度いのは六月に、リビヤ譯者註、利加にありに生れてエジプト人、アラブ族、ベルシヤ人と共にアルタクセルクスと戦つた。彼は鯨や大鯨や舟につて海上に



住んでゐた。その野蠻な巨人が倒れた時、地は血潮と泥に蔽れて山が打つ倒れたやうだつた。國は地震のやうに震動して、下界の神ブリュートーをも恐れしめ、軍神マースは危ないと思つて主神ジヨーブの下もとに通れた。ひきく打つ倒れたので眼が昏んだやうに成つて地べたにへたばつたので、皆なが雷に打たれて死んだのだと思つて、彼の大きなあごひけのまわりを歩き出した。それから、腕つ節の強い百姓の斧で打ち倒された茨の中を猛烈な勢ひで彼方此方歩き廻る蟻の群のやうに彼の大きな手足の上を飛び廻つて、幾つもその手足に傷をつけた。その爲めに巨人は眼を覺し、凡んぎ體全體に人間が居ることに氣がついたが突然傷の痛みを覺えて、恐しい雷の音のやうに叫びを擧げた。そして兩手を地について、ぞつとやるやうな顔を持上げた。それから片つ方の手を頭にあてがつて、時々そこに休むらつばけなき生き物のやうに、髪の毛にくつついて、人間がうぢやゐることを知つたが、人間は髪の毛にしがみつき、その中に隠れようと思つて、まるで、嵐の時綱に登つて帆を下し、風の勢ひを殺がうとする水夫のやうだつた。その途端に彼が頭を振つたので、人間は、怒つた風に逐はれる霰せきのやうに空中をすつ飛んで、多くの人間が、彼等の上に大暴風の時の雨のやうに落ちて來る者の爲めに殺された。それから彼は足で人間を踏みしめ乍ら、眞直に立ち上つた。

その黒い顔は一寸見たゞけでぞつとみる程で、殊に、恐しい、低い眉毛の下にある大きくみひらいた、血走つた眼まなこに至つては空も爲めに曇り、地も爲めに震ふ。私のいふことはうそではない。あの火のやうな眼に出會して、羽根あらば飛んで逃げ度いさ、さう思はない程勇敢な人間はこの世の中なかにゐない。何故といふに、地獄のルシファアの顔だつて、彼と比べれば天使のやうに見えるから。とんがつか鼻は上を向いてゐて、その鼻の孔は大きく、大きな、針のやうな毛が何本もく飛び出してゐて、その下には弓形の口が見え、唇は厚くて、その端には猫のやうに毛が生えてゐて、齒は黄ろな色をしてゐた。彼は馬に乗つてゐる人間よりも高く聳え、馬に乗つた人間は、彼の足迄しかなかつた。

拘束されてるのが厭いやに成り、のきがしつこくせがむので我慢出来なく成つて、彼の怒は狂亂きやうらんに變り、彼の恐しい手足をとらへてゐた狂暴を、足で以て洩すやうに成り、人の群つてゐるところへ這入つて行つて蹴つて人間を空中に投り上げ、人間は、恐しい霰せきのまじつた嵐が起つてゐるやうに他の者の上に落ち、自分も死に乍ら他人ひとも殺す者が澤山あつた。そしてこの野蠻な所業は彼の大きな足の爲めに埃ほこりが空中に立ち登り、厭いやでも地獄の狂暴を止めなければならなく成つた時迄續いたが、その間私達は逃げ廻つてゐた。



あ、如何なる攻撃も甲斐なきこの怒れる悪魔に、然し、私達は幾度攻撃の矢を向けたることぞ！  
 あはれなる者！難攻不落の要塞も、都市の高い城壁も、澤山一緒に集つてゐることも、家も、  
 貴戚も何のたしにもならなかつた！蟹やこほろぎ等のやうにして安全を得、遁れ場所をみつけるこ  
 との出来る小さな穴、地下の洞穴の他、如何なる場所も残らなかつた。子供を失つたあはれな母親、  
 父親が如何に多かりしぞ！つれ合ひに離れた不幸な女が如何に多かりしぞ！私の親愛なるベネデッ  
 トー、實際私は世界が創造られて以來、かくも大きな恐怖と共に、人々のかゝる歎き、哀哭の聞え  
 たことはなかつたと、私は信じて疑はない。實際かういふ眼に會つてゐる人類は他の種族の生物を  
 羨ますにはゐられない。鷲は他の鳥を征伏する力があるとはいふものゝ、早く逃げれば征伏されず  
 に済む。燕も早く逃げて鷹の餌食に成ることを遁れ、海豚も早く逃げて鯨や大鯨の餌食に成らずに  
 済む。だが私達みじめな、神ならぬ身は逃げたつて追つつかない。この怪物はゆつくり歩いて、  
 どんなに早く走る者よりもうんと早いのだから。

私は何といつたらいいか、さうしたらいいか分らない。此處彼處に頭を曲けて大きなものの中を  
 泳ぎ、死んで仕舞つて分らなく成り大きな胃の腑の中に埋れてゐる自分の姿が見える氣がするのだ  
 から。

## 豫言

### 豫言の分類

先づ第一に理性のある動物に就いて。第二に理性のない動物に就いて。第三に草木に就いて。第  
 四に儀式第五に習慣に就いて。第六に命題、判決、乃至いろんな議論に就いて。第七に（取れば取  
 る程殖える物の話の如く）自然に反した命題に就いて。そしてそれは重大な命題は御終ひ迄残して  
 置いて、あまり重大でないものから始め、先づ害悪を第一にして、それから罰を示す。第八には哲  
 學的の事物に就いて。

### 一

昔は命のあつた食物（たべもの）に就いて

昔生きてゐた體の大きな部分が他の動物の體に變る。といふのは空家に成つた家が少し宛——住  
 人のある家の中を通つて、その家の需要を供給し、それと同時に役に立たなくなつたものを運び出  
 す。即ち、人間の命は食物で持つてゐるが、その食物は自分と一緒に、人間の體の死んだ部分を運



び出す。

檻の上に眠る人間に就いて

人間は森や野原に育つた木の中で寝たり、食べたり、家を拵へたりする。

夢に就いて

人間は空に新しい破壊を見、その——空から下りて来た焔は恐いので逃げて来たもの、やうに思へる。ありとあらゆる生物が人間の語を話すのが聞え、人間は一寸の間に動かすして世界のいろんな部分を馳け廻り、闇の裡に世にもまばゆき太陽を見る。お、不可思議なる人類！汝は何にとつつかれたるぞ！御前はありとあらゆる種類の動物と語を交へ、而も動物は人間の語を使つて話をする。高いところから落ちてもちつとも怪我をしず、早瀬は汝等をその早い流の中へ入れて運んでゆく。

むつきにくるまつてゐる子供に就いて

お、海中の都市！お前のところで、御前の市民が、男も女も、私達のいふことが分らない連中の

爲めに、手も足も丈夫な縄で結わられてゐるのが見える。御前達は御互ひ同志であはれつほい小言をいつたり、嘆息したり、嘆いたりするより外、苦情を訴えたり、自由が利かなくなつたことをこぼすてだてがあるまい。こいふのは御前達を結えてゐる連中は御前達のいふことが分らず、御前達は又彼等のいふことが分らないから。

刈る者に就いて

手によく切れる及物を持つて反對に動く者が澤山あるが、その爲めに互ひに傷を負ふやうなことはない。疲れる外には。といふのは一方が前にこゝめば、一方がそれ丈け後へ引き下るから。だが、二人の中へ入る者は災難だ。結句すたくくに切られて了ふから。

折たれ、打檻される者に就いて

人間はうつろな樹の皮の中へ隠れて、そこで大聲を擧げて泣き、自分で手足を打つて狂言をする。

夢に就いて



動かさずして歩み、居ない者と話をし、しゃべらない者のいふことを聞く。

二六二

馬上の軍人に就いて

大きな動物に大變な速力で運ばれて、命を失ひ、忽ちくたばつて了ふ者が澤山ある。寮中にも地上にもいろんな色の動物が恐しい勢ひで人間を運んで、結局彼等を殺して了ふ。

死者の骨が迅速に動いて、それを動かす者の運命を定める——散。

人間は自分の命の親を亂暴にぶんなぐる——殺物を打つ、

動物の皮膚の爲めに、人間が大きな聲を挙げたり、怒鳴つたりする。——遊戯のボール。

動物の皮膚を通る風で人間が飛び上る。といふのは人間を踊らせる筈。

乳房を含む子供に就いて

多くのフランス派、ドミニク派、ベネダイクト派の者が少し前に他人が食べたものを食べ、幾月も経つて初めてしゃべることが出来るやうに成る。

靴屋に就いて

人間は自分の拵へた物が悪く成り、こわれるのを見て喜ぶ。

二

蟻に就いて

暗い洞穴の中に自分も隠れ、子供も食物も隠して、その暗い中で幾月もく、燈火も光線もなしに自分も食つて行き、家族の者も養つて行く團體がある。

蜜蜂に就いて

猶又貯えて置いた食物を掠奪され、感じの鈍い連中の爲めに慘酷にも水に浸され、溺死するものが

二六三



澤山ある。お、正義なる神！何とて汝は眼を覺して、汝の生物のかくも虐待さる、を見給はざるや。

羊、牛、山羊、その他さういふやうなものに就いて

數限りなく多くの者から、その小さい子供達が盗まれ、のぎは切られ、野蠻にも體を四つ切りにされる。

鼠を食ふ猫に就いて

お、阿弗利加の都市！お前の町では、お前の子供が自分の家で——お前の國の一番慘酷で、野蠻な動物の爲めに粉々に引き裂かれる。

打たれる驢馬に就いて

お、だらしのない「自然」、ある子供には優しい恵み深い母親に成り、ある子供には慘酷な、無慈悲な繼母となつて——何とて汝は不公平なるや。私は見る、お前の子供が何の利益も受けずに、他の者の奴隷に成り、その——他の者の爲めにしてやつた仕事で報酬を受けるどころか、ひどい罰を

食ひ、一生を——自分の壓制者に仕へて送るのを。

白鳥に運ばれる蛇に就いて

大きな蛇が、空中の、恐しく高いところで鳥と戦ふ。

驢馬の（らば）耳もきについてゐる鈴に就いて

歐羅巴の彼方此方でいろんな形をした、そして種々雑多の音を立てる樂器の音が聞えるが、あれには、あれを一番近くで聞く者はうんざりする。

驢馬に就いて

多くの勞働が飢餓や、渴や、不幸や、毆打や、突棒で突かれる等しい報を受ける。

牡牛の角のナイフの柄に就いて

動物の角の中に、何疋もくく自分の仲間の命を奪ふ鋭い鐵器がある。



牛の角で出来た弓

家畜の角で苦しい死を遂げる者が澤山ある。

獅子族がかぎのやうに成つた爪で土を掘つて、自分に服従してゐる他の動物と一緒に拵へた穴へ體を埋める。

「闇」を着た（眞つ黒な）生物が地中から生れ出て、人間を猛烈に攻撃するが、それ許りではなく奴等に食はれる時には、猛烈に嘔まれて血に毒を受ける。

猶又人間も動物も兩方とも攻撃して、大聲を擧げて人間や動物を食ふ羽根の生えた、恐しい生物が空中をつつ走る。奴等は眞赤な血を腹一杯に吸ふ。

牛は角で火を「死」な、いやうにする。——角燈。

波に打上げられて貝がらの中で腐る赤貝その他に就いて

死んでから、自分の家の中で腐つた儘に成つてゐて、あたりに厭な臭をぶん／＼させる者が何處澤山あることぞ。

小さな山羊に就いて

ヘロデの時代が又やつて来る。といふのは咎の無い子供が乳房から離されて、残酷な人間の爲めにひざい傷を受けて死ぬのだから。

牛は大いに都市をこわす原因に成る。馬や水牛も亦然り——奴等は大砲を引つ張る。

### 三

くるみ、オリーブ、ぎんぐり、栗、その他さういふやうなものに就いて

多くの子供達が現在母親の腕から、情容赦もなく打ち落され、地べたに投げつけられて不具にな



る。

たきどに就いて

大きな森の木が灰に變る。

それがあるのでぼろから紙が出来る麻に就いて

初めは馬鹿にされ、すたく／＼に切られ、さん／＼殴られたものが崇められ、尊ばれ、その誠めは畏敬の念を以て人に聞かれる。

いろいろな寶が入つてゐる木の櫃に就いて

くるみやその他の植物の中には、すばらしい寶が隠れてゐる。

森は自分が死ぬ原因に成る若者を拵へる——斧の柄。

ぶたれるくるみの木に就いて

全力を盡した者が一番ひどく打たれ、子供は連れて行かれて裸にされ、骨は折られて、めちやく／＼にされる。

ついだ芽に樹液をやる木に就いて

自分の實子よりも繼子のことを氣にする父親母親がある。

草苺に就いて

無数の生命が虚無に歸り、無数の空地が地上に出来る。

四

基督教徒に就いて

基督を信仰し乍ら、聖母の爲め丈けに殿堂を建てる者が澤山ある。



葬式、行列、燈し火、鐘、並びに従者（つまり、御葬ひ）に就いて  
される方は知らないのに、一番の儀式をその人の爲めにする。

聖者の繪の禮拜に就いて

多くの人々は自分のいつてゐることを聞かない者と話をする。彼等は眼が開いてゐるけれど、何にも見ない。人々は彼等に話し掛けるけれども答はない。耳なく、聞えない者に人々は許しを求め、めしひたる者に燈を上げ、喧しく聾者に訴える。

苦しみの日（十字架の日）の歎きに就いて

歐羅巴のあらゆる地方で、一人の人が死んだ爲めに多數の國民が歎き悲しむ。

萬聖祭の引越しに就いて

自分の住居すまゐを捨て、荷物を持つて、他國へ行つて住む者が澤山ある。

萬靈祭に就いて

亡くなつた先祖の爲めに燈火ともしびを持ち運んで、彼等を思ひ歎く者の如何に多き！

口丈けで大金を儲け、樂園を授ける修道僧に就いて

眼に見えない程の金の爲めに、それを使ふ者が勝利を得る。

すつと昔になくなつた聖者で食つてゐる修道僧の宗教に就いて

死人が千年も経つて——今生きてゐる多くの連中の米びつに成る。

回向をする僧侶に就いて

仕事をする爲めに立派な着物を着る者が澤山あるが、その着物はエプロンを真似て拵へるらしい。

懺悔を聞く修道僧に就いて

不合せの女が自分から進んで、自分の淫奔なこと、見つともない、この上もなく秘密な所業を



男の所へ残らず打明けに行く。

二七二

教會並びに修道僧の住ぬに就いて

この世の仕事、勞苦、貧苦、並びに持ち物を捨て、——かうすると神様の御氣に召すといふ顔をして、財寶の間、立派な家へ行つて住む者が澤山ある。

天國を賣ることに就いて

數限りなき愚衆が、おつぴらに、干涉も受けずに、自分の物でなく、自分がさうすることも出来ない至極尊とい物を、その持ち主なる「主」の許しも受けずに賣る。それなのに誰一人怒る者もない。

埋葬される死者に就いて

何にも分らぬ連中が——もうすっかり眼が見えなくなつた者の旅路を照す爲めに澤山の燈火を持つて行く！お、愚劣なるは人間！お、狂人染みた人類！この二つの形容詞がさういふことをする原

因を説明してゐる。

彫刻に就いて

あゝ！わが見るは誰。又もや十字架に掛り給ふ救主。

賣り物なる十字架の像に就いて

私は見る。基督が又賣られ、又十字架に掛り、「彼」の聖者達が教の爲めに苦しむのを。

體の中に聖餐麴麩（所謂基督の肉と成る）を持ち運ぶ僧侶に就いて

主の死かばね（Corpus Domini）のある殿堂が凡んどすべて——自力で、この世の彼方此方の道を歩き廻つてゐるのがはつきり見える。

香を盛つた香爐に就いて

白い着物を着け、傲慢な風をして、何にも害をしない金屬の火で他人をおさして彼方此方を歩き

二七三



廻る者がある。

そして多くの者が嘘を商ひし、奇蹟を拵へて馬鹿な連中を瞞し、若し誰も、嘘だといふことが分らないと皆なにその嘘を賣りつける。

神聖な修道僧 (Frati Santi) 即ちバリサイのともがら。

御勤めの燈火を供給する者が溺死する。——蠟燭の蠟を拵へる蜜蜂。

五

絹を紡ぐことに就いて

苦しめられ、掠奪され、ミウ／＼裸に成つて動かすにゐる者の悲しげな聲、大きな叫び、しやがれた、怒を含んだ聲が聞えるが、これは全體を動かす原動力の所以だ。

寢床の鳥の羽根に就いて

飛ぶ生物が羽根で人間を支へる。

柔革 (なめしがわ) の靴底に就いて

彼方此方に大きな動物の皮膚に乗つて歩いてゐる連中がある。

死物なるステツキに就いて

死んだもの、運動で、生きてゐる者が悲しみ、歎き、大聲を擧げて逃げ去る。

寢床をたいて、それを作り直すことに就いて

人間は恩知らずになり、たゞで寢泊りさせて呉れるものをいやといふ程引つばたいで、その中の大部分をすらせ、ぐる／＼ひつくり返らせる。

沈没する船に就いて



命のない大きな體が、澤山の人間を、恐しい勢ひで運搬して、その人間を殺して了ふ。

二七六

航海に就いて

タウラスやシナイ、アペニン山脈やアトラスの大きな森の木が風力で、東から西、北から南へ走り、同じく風力で澤山の人間を運搬する。お、如何に多くの誓ひが交されることぞ！こんなに澤山の人間が死ぬることぞ！友達や身寄りの者と何といふ別れが生じることぞ！如何に多くの者が自分の土地、おのが故國を再び見るこゝもなく、死して葬られず、その骨が世界の各地に散在することぞ。

羽根は鳥を上げるやうに人間も空へ舉げる。こいふのはその鷺ペンで書く文字でだ。

分れ／＼に成つたものが大きな結合の原因と成ることが度々ある。といふのは絹糸を結びつける——藤をわつて拵へた梳。

そして空氣の食物と成るものが夜を晝に變へる。——脂肪。

病人で食つてゐる醫者に就いて

人間がこんなに不幸に成る。——こいふのは自分の苦しみて、乃至は、自分が本當の財産、即ち健康を失ふこゝで他人が得をするのを難有がる程に成る。

坑(たてあな)並びに鑿型から出る大砲に就いて

地中から——凄しい音で、近くにいる者を聾にし、其の吐息で人間を頓死させるものが出て来て、都市や城をこわして了ふ。

小麦や、その他の種に就いて

人間は自分の命の養ひに成る食物を家の外へ投げ捨てる。

壞れて却つて大きく成るものが澤山ある——雪の上を轉がる雪だるま。

二七七



自分の存在も、自分の名も打忘れ、他の死者の分捕品の上に死んだやうに成つて横はる大軍がある——鳥の毛の上の眠。

お、！何といふ澤山の建物が火の爲めに打ちこわされるこゝぞ——鐵砲の火で。

## 六

耕した土地に就いて

地べたが裏返しに成つて、反對の半球に向ひ、猛烈な動物が潜んでゐる穴をさらけ出す。

煉瓦を焼くかまど、石炭を焼くかまに就いて

土は何日も何日も火にあぶられてついに赤くなり、石は灰に變る。

誠を説く本に就いて

靈のない物體が、その語るこゝぞで、私達が善き死を遂げる助けに成る誠を供給する。

人間と一緒に動く影に就いて

人間や動物が何處へ逃けても追つ掛けて来る——それ等の人間や動物の姿がある。そして兩方共することは同じだが、大きさが違ふから不思議な氣がする。

夜燈（あかり）を持った人の影に就いて

人間の形をした大きな姿が現れて、それが近づくにつれ、巨大な姿が却つて段々に小さく成る。

同一の時に見え影法師と水鏡に就いて

一人の人間が三人に成り、一緒に進むことが度々あるが、確實な方が彼を見捨てることが屢々ある。

畑に影つた都市（まち）の城壁に就いて



偉大な都市の高い城壁が堀の中で逆様に成つて居る。

二八〇

土を混へて濁つた流し成つて走る水、空氣に混る塵と霧、並びにそれ等のものに熱を添える火に就いて

あらゆる元素がごつちやに成り大きな、轉がる塊と成つて或ひは地球の中心に、或ひは空に向つてうねつて行く。ある時には烈しく南部地方より氷れる北方に、又ある時には東より西に進み、かくして、此方の半球から向ふの半球へ動き行く。

色の分らない夜に就いて

色の差別がつかなく成るやうなことに迄成る。といふのは何も彼も黒く成つて了ふから。

別段そのものが害を與へるのではない——劍や槍に就いて

そのものそれ自身は溫和しくつて、別に悪心もない——さういふものが悪い仲間と交際ふと、實に残酷に澤山の人間の命を奪ふ。そして命のなくなつた、坑から出るもの、即ち鐵の胸中で防禦し

なかつたら、もつと澤山の人間が殺られる。

火に就いて

初めは小さなものから、見る間に大きく成るものが生れる。そしてその生れたものは、創造物をちつとも尊敬しないが、その力を來たら、凡んどありとあらゆるものを、その自然の状態から外のものに變へて了ふ。

他國へ手紙を書くことに就いて

世にも遠い國々から人間が話をし合ひ、返答をする。

無數で——無數の線でわけて、あらゆる人間がその線の一つを自分の足と足との間に

有するやうにすることが出来る半球に就いて

人間は各々違つた半球に立ち乍ら御互ひに話し合つたり、觸り合つたり、抱き合つたりし、猶又御互ひの話を理解し合ふ。

二八一



人間の手で拵へたものが人間が死ぬ原因に成る。——劍と槍。

牢屋の壁を拵へる石灰に成つた石に就いて

曾て火に焼かれたものが多くの人間の自由を奪ふ。

## 七

葉が無しに持ち堪える草木、路で立止つてゐる河がある。

海の水が空へ飛び、山の高い頂よりも上へ上り、又人間の住家へ落ちる。——それは雲だ。

人間は自分の食物を投げ捨てる。——それは種蒔だ。

御互ひの話が分らないやうな時代が来る。——それは土耳其人と一緒にゐる獨逸人。

人間が羽根の生えた生物に變つて墓場から出て、外の人間を攻撃し、手やテーブルからさへ外の人間の食物をかつばらふ。——蠅。

自分の御つ母さんの皮を引つばいで、それを折り重ねる者が澤山ある。——地を耕やす者。

水陸の、澤山の生物が星の間に入る。——遊星。

彼方此方で死人が生きてゐる人を運んでゐる。——車と船。

多くのものが口から食物を奪はれる。——窯から。

そして口が他人の手で一杯に成つてゐる者がその口から食物を奪はれる。——窯から。



夏の雪は高い山のとんがった峰に集められ温かいところに運ばれて、夏、市場で御祭をする時に落される。

東が西に、南が北に飛び込んでひざい音を立て、ふるへ乍ら宇宙をくるく舞ふ。——西へ吹く東風。

光線が地べたに火をつけ、その火で空の下にあるものが燃えるが、光線は道を邪魔するものに反射されて下の方へ向ふ。——中びくの鏡は火をつけるが、その火でかまが温まる。そしてこれは原因があつて、その原因はその屋根の下にある。

海の大きな部分が空へ飛んで行つて長い間歸つて来ない。——それは雲だ。

動かす者と動かされる物ミを分ける運動がある。

死人が地中から出て、その猛烈な働きで無数の人間をこの世から追ひ拂ふ。——地中から出る鐵は死んだものだが、武器と成つて澤山の人間を殺した。

大きな山は海から離れてゐても、海を、海がゐるところから押し遣る。さういふのは河が山から持つて来た土を運び下して、それを海岸に積み重ねる。で「陸」がやつて来るところは海が退却する。

山の麓をしようつ中動いてゐる雲から落ちた水が長い間何にもしずにある。そしてこれはいろんな地方で見ることだ。——降る雪、そしてそれはつまり水だ。

山の大きな岩が多く、大きな森の木や野生の動物や家畜を焼いて了ふ程の火を放つ。——火打箱の火打石——それは森から取つて来た薪を灰にする火を出す、猶又それで動物の肉も焼く。



一番必要の人物といふものは誰か分らないもの。よし分つてゐても、それ程に重んじられない。

冬、雪の中に埋れてゐたものが夏に成るに残らず現れる。——包むことの出来ない嘘も亦此の如し。

貧乏の恐怖に就いて

腹黒の恐しいものが自然に——人間に恐怖を感じさせるので、人間はそれを遁れやうと思ひ乍ら、まるで狂人のやうに、その無限の勢力の上を自棄に走る。

死者の語に耳傾ける者は幸ひなり。さいふのは善き書物を読み、その誠めを守ること。

人間が一番恐がつてゐるものを追つ掛ける。といふのは不仕合せに成つてはいけないと思ひ乍ら、その爲めに却つて不幸に成る。

別々のものが一つに成つて、人間に人間が失つた記憶を恢復してやるさいふ「徳」を自然に獲得する。——さいふのは別々の片で出来てゐて人間の思想行動の記憶を保存するバイラス(譯者註、紙を作る草)の紙だ。

そこに書いてあるこゝに對して感情を有してゐる動物の皮膚に就いて

いろんな感情が一杯書いてある皮膚と話をすればする程知慧が得られる。

墓場なる人間の口に就いて

横死の遂げた者の墓場から大騒ぎが聞える。

貪慾な者に就いて

熱心に、そして又きなく、し乍ら——いけない物だといふこゝも知らずに、しよつ中畏れかしらんでゐるものを猛烈な勢ひで追つ掛ける連中が澤山ある。



もう長いこまはないから、大まかに成るのが本當なのに、歳取るにつれてけちに成る連中に就いて

経験もあり考へもあると思はれてゐる連中がいろんな物が要らなく成るにつれて却つてがつくしてそれを求め、それを貯め込むのを見る。

金(かれ)と金(きん)に就いて

それは中空の洞穴から出て来るが、世界の全国の民が、その助を得る爲めに、胸を轟かせ、心配をし、辛い思ひをして、勞苦し、額に汗を流す。

貴金屬に就いて

暗い、陰氣な洞穴から人類全體を大きな悩み、危険、それから死ぬる眼に會はせるものが出て来る。その後にくつついて行く者には千辛萬苦の後に、喜びを興へるが、それに敬意を表さない者は貧苦のうちに死ぬ。それは數限りなく罪惡を引き起し、あはれな人間をそのかして暗殺や、泥棒をさせ、奴隸の境涯に身を落させる。自分にくつついて来る者をも怪しいとにらみ、それは又自由市

(譯者註、それ丈で政府も法)からその自由を奪ふ。多くの者の命を奪ひ、人間同志をいろんな遁口上、手管、不信で苦しい眼に會はさせる。

お、卑しい怪物！御前がくたばつた方が、人間に取つてどんなにいゝか知れぬ！奴の爲めに大きな森が木を剥ぎ取られ、無数の生物がその血統を失ふ。

女の持參金に就いて

そして若い女を、親の見張でも、壁の力でも、男の欲望や亂暴な所業から防禦することか出来ないから、たとひ女に金があり、位置があり、すば抜けて器量好しでも、女を貰ふ氣のある者には女の親の身内から大した御金を拂はねばならぬ時代が来る。これを以て見ても自然が人類を、この世に無用の物で、あらゆる創造物の破壊者として撲滅したがつてゐることが明かのやうに思はれる。

人間の殘酷なるこまに就いて

この世の生物はしよつ中戦争をして、兩方とも大した損害を受け、屢々死ぬることさへある。而もその爲めに惡意が減る譯ではなく、彼等の猛烈な手や足の爲めにこの世の大きな森の澤山の木が



地に押し倒される。そして奴等は食物を腹一杯に詰め込むと、今度はあらゆる生物に死、苦惱、勞苦、恐怖、追放を行ふことが楽しみに成る。そしてその限りのない誇の爲めに空へ上らうとするが、手足が重すぎて進むことも出来ない。地上にも地中にも、水の中にも、追つ掛けられ、迷惑を蒙り、乃至は又破壊されないものはなくなり、或る國にあるものは他の國に持つて行かれ、自分の體も、自分が殺した生物の墓場と成り、運搬の道具に變る。お、地よ！何なれば口を開きて、彼等を汝の大いなる地獄、洞穴の深き割目に投げ込みて、御空の下で、かくも野蠻な、無慈悲な化物を見せびらかすことを止めにしないのか。

大正十一年四月廿五日印刷  
大正十一年五月一日發行

(定價金貳圓拾錢)

オレナドルの手記

譯者 市橋善之助

發行者 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地 足助素一

發行所 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地 叢文閣  
振替東京四二八八九  
電話番町四八一二番

印刷所 東京市京橋區南金六町十二番地 英文通信社印刷所  
(印刷人) 望月精矣



395974  
~~261-L55~~  
2

25. 9. 19



終